

【曲目解説】

フォーレ (1845. 5. 12~1924. 11. 4) は、1920 年に、それまでの作曲家として、教育者としての優れた活動に対して、レジョン・ドヌール勲章を受けましたが、その年、管弦楽のための組曲「マスクとベルガマスク」を作曲しました。その曲名は、さきにフォーレ自身が作曲した歌曲「月の光」(ヴェルレーヌがワットーの絵に靈感を得た詩による)の中から採られました。その曲想は、ワットー~ヴェルレーヌ~フォーレという組み合わせから想像される、優美で雅やかな夢幻の抒情とは全く異質の喜遊曲的な作品となっています。その性格は、序曲冒頭からはっきりと示されます。「レクイエム」と始めとするフォーレの作品を知る耳には、その響きは新鮮な驚きがありましょう。フォーレは、18 世紀の作曲家の手法によって、軽妙な仮面舞踏の道化とひなびたベルガモ風舞踏を思い描いているようですが、最後のパストラールでは、いかにもフォーレらしい雰囲気漂わせ、静かに締めくくられます。なお、1980 年 9 月 6 日、アンサンブル・ディマンシュが第 7 回演奏会において、この曲の日本初演をしました。

チェロ協奏曲の名曲といえば、ドヴォルザーク、エルガー、シューマンという名が思い浮かぶことでしょう。今夜演奏するハイドン (1732. 3. 31~1809. 9. 4) の作品もそれらと並ぶ名作であります。ハイドンといえば、「交響曲の父」と言われ、作品の数も 100 曲を越え、交響曲作曲家のイメージが強いですが、彼の作品の幅は大変広いものです。オラトリオ「天地創造」を始めとする、宗教曲・合唱曲にも優れた作品が多いのですが、協奏曲の分野でもハイドンの力量が発揮された作品を見ることができます。ヴァイオリン、チェロ、オーボエ、ファゴットを独奏楽器とする協奏交響曲や、散逸していますが、コントラバス協奏曲など独奏楽器も多彩です。本日演奏する第 2 番のチェロ協奏曲、独奏チェロパートは、綿密に書き込まれ、かなり高度な技巧を要求されるもので、近代のチェロ協奏曲に劣らぬ難曲となっています。古典派としては、モーツァルトもベートーフェンも (トリプルコンチェルトがありますが) 書かなかったチェロ協奏曲の貴重なレパートリーとなっています。

ベートーフェン (1770. 12. 16~1827. 3. 26) の第 8 交響曲は、第 7 番と並行し同じ時期に作曲されています。第 5 交響曲、第 6 交響曲と同様、その曲想は強い対照性を持っています。第 7 交響曲が、徹底的にリズムの要素を追求し、展開して、しばしば「ディオニソス的」と言われるのに対して、この第 8 交響曲は、第 3 楽章にスケルツォではなく、メヌエットを置くなど、一見典雅な古典的あるいはロココ的な外観を持っています。しかし、この交響曲は、内面的に極めて強靱なものを秘めています。それは既に第 1 楽章冒頭から示されます。3 拍子の様々なリズムが次々に現れ、また和声的な部分、対位法的な部分、楽器の扱いなど、わずか 11 小節で、この交響曲の複雑な性格が鮮やかに提示されます。その後 12 小節目からの第 1 ヴァイオリンの旋律、そしてそれを支える 3 種類のリズム、及び和声進行によって、英雄的な精神が描かれます。それは、決して自己顕示の強い「英雄」ではなく、あくまでも精神的、内面的な「英雄」、大人の「英雄」であります。ユーモアもあり、優雅さもあり、そしてたたかひに挫けず、困難を乗り越える、大人の「英雄」です。同時に初演された第 7 交響曲が熱狂的に喝采を浴びたのに対して、この第 8 交響曲は、不評であったとされますが、ベートーフェンは「だからこそ、この曲はいいのだ」と語ったと言われています。